

現代会計時評

駒澤大学教授 石川 純治

資本主義の多様性と IFRS
—英米型世界標準の史的相対—

第14回

複式簿記の世界伝播とヘゲモニー移転

いささか唐突に聞こえるかもしれないが、話を複式簿記の世界伝播から始める。一般には、「光は始め15世紀に、次いで19世紀に輝いた」(A.C.リトルトン)というように、複式簿記は14、15世紀のイタリアから18、19世紀にイギリスへと伝わっていったといわれる。だが、その間の17世紀のオランダに注目すると、イタリア(14、15世紀)→オランダ(17世紀)→イギリス(18、19世紀)の3段階で伝播していくことになる。茂木虎雄『近代会計成立史論』(未来社、1969年)で展開された「3段階説」、「会計世界一周論」である。ちなみに、この「一周論」ともかかわって、すでに研究されているかもしれないが(筆者は文献をまだ知らない)、イギリス東インド会社の3大取扱商品(茶、キャリコ、阿片)、なかでも阿片の帳簿分析への展望は興味をそそる(「阿片の会計史」)。

さて、この話をしたのはわけがある。水野和夫・萱野稔人『超マクロ展望 世界経済の真実』(集英社新書、2010年)での興味深い指摘と重なるからである。すなわち、そこでの資本主義

500年の歴史(まさに超マクロ展望)を利潤率の変化から読み取る点は、とりわけヘゲモニー移転としての資本主義の歴史を捉える視点は興味深い。そのなかで指摘されているイタリア→オランダ→イギリス→アメリカへのヘゲモニー(覇権国)の移転が、ちょうどここでの複式簿記の世界伝播と照応するからだ^①。

ここで見落としてならないのは、実物経済での利潤率の低下→ヘゲモニーの移転という視点(交易条件の変化)であり、さらに経済の金融化がそのヘゲモニーの移転に伴うという視点である(実物経済での利潤率の低下→ヘゲモニーの移転→経済の金融化)。この点は、今日の経済の金融化→実物から金融に根ざした現代会計→IFRS(国際会計基準)の世界浸透、という視点につながる^②。

今日、とかくIFRSの中での新たな会計基準だけに目がいきがちだが、こうしたより長い歴史のスパンと経済構造の変化から会計(制度)を捉える視点は重要だ。内側だけ見てはIFRSの「正体」はなかなか見えてこないだけに、こうした歴史的視点(史的俯瞰)が不可欠なのである。

ここでヘゲモニーの移転という点で世界構造の変化をみておくと、19世紀半ばから20世紀初頭のバクス・ブリタニカと、その後台頭するバクス・アメリカナ(アメリカ極体制)とその崩壊過程、そしていずれの背景にも共通して存在する2つの力(軍事力と経済力)とその衰退過程をみることができる。重要なことは、今日のアングロサクソン・モデルの世界伝播によるデファクト・スタンダードの世界浸透も、そうしたより大きな世界構造の変化というマクロ的視点から捉える必要があるということである^③。とりわけ、今日そのデファクト・スタンダードの基盤が揺れ動いているだけにそうである。ちなみに、ディスクロージャー会計・監査の先駆けともいえる1853年のイギリス勅許会計士協会の設立、1868年の鉄道規制法、そして1879年の会社法はまさにバクス・ブリタニカのなかでの出来事(近代会計制度の成立)であり、それは英米を中心とした現代の国際会計制度のグローバル化という今日的展開のルーツともいえる。

英米型世界標準—史的相対化の視点

ところで資本主義の形は1つではなく、多様な形をとる。英米型(アングロ・サクソンモデル)もあれば独仏型(フランコ・ジャーマンモデル)、さらには中国の国家資本主義、そして今日そのあり方が問われている日本型など。この点で、「資本主義の新たなシステム間競争」と題するコラム(『日本経済新聞』5月19日「大機小機」)はいくつかの点で興味深い。まさに「資本主義対資本主義」(M.アルペール)であり、英米型の世界標準の時代がいつまでも続かないこと、そし

て「欧州大陸に、金融主導のアングロ・サクソンモデルとは一線を画すフランコ・ジャーマンモデルの新資本主義が復活する可能性がある」とする点は、IFRSが英米型世界標準の歴史的所産ともいえるだけに重要なところだ。

さらには、英米型の「個人」中心の新自由主義とは異なって、「社会」を重視する新社会民主主義的な変革では「共同社会の担い手として地域と中小企業に焦点が当てられる」(オランダ仏新大統領の公約)とする点は、IFRSとはその性質を大きく異にする中小企業会計のあり方とその重要性にも結びついてくる^④。

かつて筆者は、世界構造の変化を踏まえたIFRSの今後のあり方に触れて、「(中略)こうした英米基準の基礎にあるもの(アングロサクソン・モデルの本質)、とりわけその生成変遷の理解なくして、今日起きている会計諸問題のよってたつところはなかなか見えてこないといえる。さらにいえば、こうした株主(投資家)資本主義が資本主義経済の1つのあり方—“アングロサクソン流金融資本主義”—にすぎず、したがってその生成変遷の一過程(1つの局面)であることをふまえたうえで、今日的会計現象を捉える視点(史的・総体的相対化)が重要になる」(前掲拙著『変わる会計、変わる日本経済』201頁)と述べた。

重要なことは、世界経済の大きなスパンでの構造変化や資本主義経済のあり方が一様でないことを踏まえたうえで^⑤、英米型世界標準の史的相対化の視点をもつことである。IFRSは単に会計ルールの世界基準というレベルではないのである。

③ この点で、マクロ金融経済政策の「ワシントン・コンセンサス」崩壊は示唆的だ。その教訓もふまえた、「アカウンティング・コンセンサス」の問題点は、Shyam Sunder, "IFRS and Accounting Consensus", *Accounting Horizons* Vol.23, No.1 (2009) で触れられている。

④ この点は現代の会計が市民社会や公共性とどう接合しうるか、という今日的課題ともかかわる。前掲拙稿「『金融・開示・取引法』優位の現代会計」21-23頁参照。

⑤ この多様性という点は、Rules(文書化された基準、標準)に対するSocial Norms(社会の習わし、慣習)の重要性とも重なる。本誌2011年4月18日号(No.3012)「Shyam Sunder教授に聞く」参照。

① 詳しくは、拙著『複式簿記のサイエンス』(税務経理協会、2011年)第13章付論9「簿記会計の発展通史」参照。

② 「経済の金融化」に照応した「会計の金融化」(財務会計の金融会計化)については、拙著『変わる会計、変わる日本経済』(日本評論社、2010年)223-224頁、および拙稿「『金融・開示・取引法』優位の現代会計」(『企業会計』2012年2月号)参照。